



『諸国新百物語』と『御伽比丘尼』

著者	太刀川 清
雑誌名	紀要
巻	30
ページ	1-6
発行年	1975-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1118/00000859/

『諸国新百物語』と『御伽比丘尼』

太刀川 清

『諸国新百物語』略して『新百物語』(内題)という。さればこの名は既刊の『諸国百物語』に追随するものであるばかりでなく、『百物語』にも追随する。これが「新諸国百物語」と名づけなかつた妙味である。

『諸国百物語』(延宝五年正月刊)は文字通りの怪談集であり、『百物語』(万治二年正月刊)これは笑話中心の雑話集で軽口本に類するものである。『諸国新百物語』の書名はおのずとこの両者の内容にかかわるものであることを暗示する。その序文にいう。

それが中に艶なるあり、哀なる有 おかしきあり、怪しきあり、おそろしきあり是彼誇擧正しき咄をぬき書して咄百に満すといえども改めず

果してこれがその内容である。そしてそれらは「證擧正しき咄」であるといふが、この言葉にも作者の意図がある。「證擧正しき」とは物語の本質にかかわる語であり、「咄」はなきことばなしすなわち咄本にかかわる語である。よつてこれを一括することには明かに矛盾があるが、これまた『諸国百物語』と『百物語』の先行二作を意識しての叙述であつた。かくして『諸国新百物語』と名づけた書名にもひとかたならぬ配慮のあとが窺えるが、後述するように、それにかける作者と書肆の気概を知るならさらにそれも肯けるのである。

一

『諸国新百物語』はいわゆる西村本である。元禄五年正月に既刊の『御伽比丘尼』(貞享四年刊)の改題版行であるが、それよりさき『新伽婢子』(天和三年九月刊)と名づけた怪談集を皮切りに『宗祇諸国物語』(貞享二年正月刊)『浅草拾遺物語』(貞享三年一月刊)そして『御伽比丘尼』とつづいた怪談集を、いま『諸国

新百物語』をもって締めくくろうとする。はじめに『伽婢子』(寛文六年正月刊)にちなみ、あとに『百物語』でしめて西村本の怪談集はこれ一括されることになる。その間約十年、西村に怪談小説にかける面子と情熱とそして商策があるとするれば、まさにこれに尽きることになる。ほかでもない怪談小説の源流をたどるまでもなく、『伽婢子』と『百物語』とはわが怪談小説の正統をいく名称であつたからである。^(注2)

西村の怪談小説、それは絶えず『西鶴諸国咄』(以下単に『諸国咄』という)(貞享二年正月)に奔弄されたかに思われる。『諸国咄』にさきがけて天和三年九月に『新伽婢子』を出版した西村は、つづいて怪談小説の第二作『宗祇諸国物語』の出版を目前にして突如『諸国咄』の出版を知つたのである。了意の『伽婢子』に追随して『新伽婢子』の出版を企てたこともあつて怪談小説の分野で他にまさつて一日の長を自負する西村は、これに刺戟されて当初四巻四冊を予定していた『宗祇諸国物語』を急擧『諸国咄』同様の五巻五冊本として、その増加した話の素材を当の『諸国咄』を意識して求めたりして、揃つて貞享二年正月に出版のはこびとなつたのである。^(注3)翌年における西村の西鶴への異常な対抗意識の前哨戦はすでにじまつていたのである。

その年、貞享三年西村は予定もしなかつた『諸国心中女』と『浅草拾遺物語』の二作を急擧上梓した。^(注4)前者は西鶴の『好色五人女』(貞享三年二月刊)を後者は『諸国咄』を意識したものであつた。『諸国咄』またの名『天下馬』が古い『宇治拾遺物語』にちなむなら、こちらは浅草観音の茶店で翁から聞いた話として『浅草拾遺物語』と名づけて対抗した西村の気概はそのま話題のつけ方にもあらわれただけでなく、話を扱う態度も『新伽婢子』や『宗祇諸国物語』と西村の怪談小説に馴染んで来たものには不思議に思はるほど新しい態度が西村本来の怪談の中に混つていたのである。

そして、さらにその対抗意識は翌貞享四年の『御伽比丘尼』まで及ぶのである。『御伽比丘尼』五巻五冊は、この年二月「江戸神田新草屋町 西村半兵衛、京三条通 西村市郎右衛門」を版元として出版された。これまでのように形式や態度で『諸国咄』に対抗してみても所詮模倣は模倣であってそれに泥むという誇りを免れまい。巷の噂はかならずしもわれに与すことのないのに気づいた西村は、このたびは『諸国咄』の類話をもって西村らしいところを見せることによつて自からの面目を保とうとしたのである。後日、都の錦が「いでや都の好色文の達人西村市郎右衛門筆を振うて西鶴を消すといえども云々」(『元禄太平記』巻一)といつたのは、なにも好色文学だけではなかつたのである。

二

『御伽比丘尼』で『諸国咄』を明かに意識したと考えられる類話には次の三篇がある。

「水で洗う煩惱の垢」(御伽比丘尼・巻四)——「紫女」(諸国咄・巻三)

「思ひは色にいつる酒屋」(御伽比丘尼・巻五)——「忍び扇の長歌」(諸国咄・巻四)

「行暮て此辻堂を宿」(御伽比丘尼の巻五)——「残る物とて金の鍋」(諸国咄巻三)

さて、「水で洗う煩惱の垢」は武蔵の品川の商人庄八は恋女房にさきたたれて悲しみの涙にくれて臥していると、夜半、忽然と女房の面影があらわれて「未だ朽ちせぬ契の侍り」と馴れ親しむ。庄八の親は女が毎晩通つて来るのを不審に思つて怒より窺うと、庄八は鬮と並んで語りあつていたので浅ましいことと思つて高德の上人にこのことを話す。事の次第を知つた上人は庄八の家に出かけて、庄八に冷水を浴びせかけると、鬮はたちまち消失してしまつた。

この話はいうまでもなく『剪燈新話』(明・瞿佑)の「牡丹燈記」に拠つたものである。他方、『諸国話』の「紫女」は必ずしもその「牡丹燈記」に拠つたものでなくとも、その系列の上にあることは間違いない。

外むきは武道をたて内心は出家ごころの三十の寡夫伊織のところに美女が現われるが、二人はいつかわりなき仲となる。伊織は陰虛火動が昂じて次第に衰弱する。それを見咎めた知人のくす師道庵は、紫女の仕業であることを教え「菟角はこの女を切り給へ、さもなくてはやむ事なし」とすすめて女を斬らせるのであ

る。紫女に妖怪じみた陰翳が微塵もないのも、女を斬ることによつて解決をはかるのも極めて現実的な処置である。それに対して庄八の場合は、上人が冷水を浴びせて庄八の妄執の念を去らせることで解決をはかろうとする。しかしこれは妖怪の撃退をはかるためのものではなく、「浅ましきかな、己が輪廻執着の一心にて、亡者にもくるしみを増し、くらきより猶くらきにまよはしむる。されば今爰にあらはるゝはまよへる物から、もとの女とぞ見えつらん。只されたるかうべにてありき、爰に清浄の水をかけて、ぼんのふにされるをすゝぎ正念にかへらしむる」ためなのである。かくして庄八は仏の道に入って心法の悟りを開くという結果となる。

妖怪に対するふたつの解決方法のどちらが世の一般論にもとづくかといえは、無論西村の側にあるといえよう。当時の通念では怪異は斬ることによつて解決出来るほど現実論に立脚はしていないのである。もともと怪異は超現実世界のもので次元を異にして存在するものと考えらるなら、ついに現実では解決出来ないものなのである。したがつて自らを正念に帰すること以外に解決の手段はなかつたはずである。斬ることによつて解決する西鶴の方法は新しいものであつても当時としては常識を逸脱したものといふことになる。

次に「思ひは色にいつる酒屋」は都のさる辺りに住む某の左吉という色好みのお話である。かげゆの小路の酒屋の娘がどういふ縁か、身分不相応のこの男に思いを懸けたが、その気持を男に伝えることが出来ずに悩んでいる。左吉もこの娘をかい間見ながら、その娘を慕うようになるが、これも幸便がなく思いわずらつているうちに寄宿さきの兄の許を追い出されて、昔の召使いのところで日を送らなければならなかつた。だが「誠に然るべき縁にやありけん」。娘の酒屋に奉公することになつた。かくするうちある日の夕方娘から和歌を添えて誘いの手紙が来たので、忍んで逢う顔を得たが、夜毎に逢ううちに父母の知るところとなつてしまひ、娘は自分をつれて立ち去つてくれることを男に哀願する。それを見れば白の小袖に珠数をかけた姿であつた。忍び出た左吉と娘は双の岡で心中して果てるのである。

一読するなら『諸国咄』の「忍び扇の長歌」がこれと同巧異曲の一篇であることに気づくことはやさしい。左吉はここでは中小姓くらいの賤しい男、酒屋の娘は大名の姫御に相当する。遊山の姫御を見かけて恋心をつのらせ、つてをもとめて奥方へ奏公すると「縁は不思議なり」。姫御の方でも慕うようになつて黒骨の

願に、自分を誘って屋敷を立ちのいてくれるよう認めて男の長屋に下げこんだ。かくして二人は手を携えて忍び出るのであって、ここまでの筋は同巧である。しかしそれからとは「思ひは色にいづる酒屋」とは趣を異にするのである。屋敷をのがれた出た二人は裏長屋で佇びしい暮しをしているうちに捜し出されて、男は直ちに成敗され、姪御には自害がすすめられたが「われ命惜しむにはあねども身の上の不義はなし」と人間として自分の行為の正しさを主張し、不義に対する世論の不当さをとうとうと開陳して、その後男のあとを弔うため剃髪するのである。

西村には前年『諸国心中女』があった。心中とは貞節の意である。その中には「黄泉のみちびく恋の駒鶴」の如き一篇もあった。京の黒沢某という裕福な人の息女が卑しい烏帽子折りの息子駒鶴に恋をする。これを知った娘の親は立腹し、男の卑俗さを罵り辱かしめるが娘は駒鶴を誘って三野の墓所で共に刃に伏した。世間ではこれを見事なる心中女と讃えたのである。「思ひは色にいづる酒屋」と同巧の一篇である。

世間でこの娘を心中女と讃えたというのは西村の独断ではなく、当時の道徳の一般論を代弁したまでであったであろう。「思ひは色にいづる酒屋」の結末で、それぞれの身内が情なく骸をうち捨てたのを此あたりの農民が哀れに思つてひとつの塚に葬つたのは、道徳に殉じた者への世間の人たちの哀悼の気持の表出にほかならない。もしも自由恋愛や結婚の自由を是認し主張する『好色五人女』の如きものが世間の注目と関心を勝ち得たものであるならば、それはそれだけ一般論との隔りの大きさを認めるべきであって、まず西村流の道徳の一般性を認めざるを得ないのである。つまり世論の味方はむしろ西村にあったということになる。西鶴が通念に逆つて「忍び扇の長歌」の如き進歩的な自由恋愛を掲げて斬新さを問題にするなら、西村は敢て「思ひは色にいづる酒屋」のように保守的な態度で対処しようとするのはいかに西村らしいやり方である。

さて次に、「行暮て此辻堂をやら」とは、近江草津の親孝行の息子が江戸へ商いに下る途中とある辻堂で時雨の晴れ間を待つうち、いずこからともなく翁があらわれ、火打ちあたりで小石を火にして暖をとらせたばかりか、虚空より童子を呼んで酒をもたせてもてなす。この翁は親孝行故に五百の齢を重ねた仙人であった。その仙人のいうには「君来る月ふりよの病にて死する災あり、さるによつて此所にとどめ参らすこと一年」そのため災難を逃れることが出来たのである。因

に帰る途中わずか一日一夜と思つたのは実は一年もたつていた。のちその家は富み栄えたが「孝の道こそあらまほしけれ」と結ぶのは教訓話である。

この話また『諸国咄』の「残る物とて金の鍋」に対処する。それは『続齊諧記』の「鶯籠記」の翻案であったが、老人が酒の樽を出し、肴といつて金の小鍋を出すまでは問題ないとしても、酒の相手に美女を出し、老人が美女の膝枕で眠るとその美女が若衆姿の密夫を出して戯れるのは奇異そのものであるが、その事だけをとりあげれば西村の道徳観からは好ましくない。そうした懸念を省き、その奇異も孝行息子の善果によつたものであるという因果律的解釈をすることによつて「残る物とて金の鍋」の如き奇異談の忠実な紹介にとどまるのではなく、わが立場での翻案であるという自負があつたであろう。

四

『諸国咄』に対処するために他人を促してみても『宗祇諸国物語』の如く巻数をおわせて量で対抗するか、『浅草拾遺物語』の如く説話の叙述形式で対抗するにしても、つまるところ本質的な意味での対峙を期待するわけにいかない。まとなつては、自からの手に期待するしかなかったのである。

『御伽比丘尼』は山城木幡清雲尼の作つたものとあつて、西村の作とはない。だが見て来たような西村の怪談小説の経過を考へるならば、やはり当の西村市郎右衛門の作である可能性は濃い。それにその内容も尼僧作にしてはあまりにも縁遠いものがないわけでない。好色談はまあいいとしての男色の纏れから敵討ち及ぶ話などは尼僧の叙述に相応しいものであろうか。その種のものは「あけて悔しき文箱」(巻一)「恥を雪し御身拭」(巻三)「名は頭れし血文あり」(巻五)で全巻二二篇のうち三篇は必ずしも多くはあるまいが、これを扱つたのは思うに、『御伽比丘尼』出版の一ヶ月前に出た西鶴の『男色大鑑』(貞享四年一月刊)に刺戟されてのものではなかったか。これまで女色を扱って来た西鶴にしても男色は新しい試みであり、これが以後の武家物を導くことになることを考へるなら画期的な作であつたはずである。それだけにこの作品に対する世間の関心も高かつたであろうし、西村にしても気になる存在であつたはずである。

西村本にはこうした尼僧作というものが、すでに『花の名残』(天和四年一月刊)の妙句尼があり、また『御伽比丘尼』の直後の出版である『山路の鶯』(貞享四年四月刊)の妙仙尼がある。これらが西村市郎右衛門の匿名であつたとするものもあり、

それに倣えば『御伽比丘尼』の清雲尼もやはり西村の匿名であったと思われる。それにしてもなぜか企てをするのであろうか。さらに深く考察しなければならぬが、作品の評価を気にする作家としての矜持と危懼によるものであつたであろう。そしてそれはまた書肆なればこそ可能な企てであつたといえよう。本屋作家として、その有利な条件を背景に西鶴に對抗しながらも自らの作家的技量と資質を問われることを選べる便法であつたことは間違いない。その意味ですでに西村は西鶴に一步も二歩も譲つていたのである。

五

西村が『御伽比丘尼』を『諸国新百物語』と改題し版行したのは極めて急な思いつきであつたようである。『諸国新百物語』の奥付けには「元禄第五曆申正月吉祥日 西村市郎右衛門新板」とある。従来西村本が合版を常としていたのちがつて、このたびは市郎右衛門の単独出版であつた。改題再版の故であろうかとも考へてみたが、その年の正月、すなわち『諸国新百物語』の刊行と同月ということになるが、市郎右衛門自身も加わつて版行した『広益書籍目録』には『御伽比丘尼』の名は載つていないが『諸国新百物語』の名はないからである。とすると改題版行は全く突然のことであつたようである。

なぜ急遽かかる筆に出たのであろうか。『諸国咄』の出現によつてあれほどまでに奔弄させられたのはすで見え通りで、それはいづれも西村の怪談小説界における自負を貫き通すための企てにはかならなかつたといふべきで、その西鶴が怪談小説などにどまることがなく浮世草子の新しい分野にすすんで行つたことは、それはそれで西村は一応の平静はとりもどし得たはずである。だがここには西村の心を揺がす出来事が起つたのである。同じ京都の書肆林九兵衛、それも同じ本屋作家であるこの人が、浅井了意の遺稿を出版して『伽婢子』の続篇を企てたといふのである。『狗張子』の出版がそれである。元禄五年正月刊行の『狗張子』は前年十一月にはその林九兵衛こと文会堂によつて成稿していた(『狗張子』序)。文会堂が了意の遺稿を出版することに怪談小説作家としての自らの今後にかける恣意的なところが多分にあつたのであるが勿論そのような文会堂の企てなどは西村の知る由もないところで、『御伽比丘尼』の改題出版など思つてもみなかつたであろう。しかし『狗張子』の出版を見たいま『伽婢子』に追隨して『新伽婢子』の出版を果たしたこともある西村には、ここで『伽婢子』の続篇が世に

出たことを黙つて見すごすことが出来なかつたのである。このたびは『伽婢子』ならざる『百物語』で自らの立場を維持しようとして新作の余裕もないままに『狗張子』同様元禄五年正月に揃えて出版をはかつたのである。

『御伽比丘尼』の初版からわずか五年目にして、しかも『書籍目録』に掲載する用意もなく、急遽この書が先行の西村の怪談小説を凌いでまで再版に及ぶほどの理由があつたであらうか。ちなみに『新伽婢子』は享保十二年に『御伽大黒の槌』と改題され、さらにそのあと天明二年に『怪談仙界鏡』と再び改題されて大阪の柏原屋庄兵衛から出版されている。『宗祇諸国物語』は正徳三年に再摺して外題を『諸国物語 怪談袖鏡』と改めて西村市郎右衛門、丹波屋茂兵衛合版での出版があるが、いずれもはるか後日のことである。『浅草拾遺物語』は再版改題のいずれも偶見することもない。おそらく再版の機会もなかつたのであろう。そうした中で『御伽比丘尼』だけが先行の怪談小説にはるかにまさつて人気があつたとはいへない。とすれば単独版行の『諸国新百物語』は明かに西村市郎右衛門個人の恣意的な態度からの出版であつたといふことになるであろう。

かくして『諸国新百物語』の序文を草した「洛下俳林子」とはまぎれもなく西村市郎右衛門その人といふことになりそうである。「洛下俳林子」とは未遑と号した俳人にありそうな雅号ではないか。

六

その序文にいう。

凡人の心を慰めしむる道 さまざまなりといへども、形を動かさずして、然も見ぬ世の人を友とすること昔物語にしくはなし。爰に百物語といふは、おどろおどろしき話ばかり百に満たしめて、不思議あるを得つ事とぞ。それは血氣盛んの若人武士などは好ましかるべし。わが如きは唯何となく見聞きしたることを打ち交へて語らんこそ此上なら慰めわざなるべけれ。

この叙述には怪談会としてよりも、享乐的な話しいの場としての百物語への関心がある。そしてこれが扱つた『徒然草』の

ひとり灯のもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とすぞこよなうなくさむわざなる。(十三段)

と併読することにより、ひとり密かに書物を繕いて見ぬ世の友との交渉に己の魂

に喜びを感じている古人と、人々寄り集まっては見聞を語りあって楽しむ今人の違いを認めるのであるが、それは人集まれば無聊を慰めるために話に興じた巷の空気をそのまま反映したものであったであらう。すなわち百物語も本来の怪談に捉われずに多種多様な話に興じる語り場となっていたのである。

そうした百物語の背景には、百物語怪談会に対する世間の認識にもとづくところがあった。かつての百物語は「百ものがたりすればおそろして事有といふ、いざせんとせちにはなすなり」△万治二年『御伽物語』▽「昔より人のいひ伝へし怖ろしき事怪しき事を集めて百話すれば必ずおそろしき事怪しき事ありといへり」△寛文六年『御伽子』▽また「昔より百物語と云ことをすればかならずその座に不思議なる事ありといへり。いざこよひ語りて心見ん」△延宝五年『諸国百物語』▽といった百物語で、そこでは百物語を信じて疑わない者の真摯な姿勢がある。したがってその結果は必ず変事が起ることが予想され、また事実起こりもしたのである。

しかるにちかく貞享元祿の交ともなると「百物語かたり始て俗説のごとき怪異ありやなしや是をこころむ」△貞享二年『宗祇諸国物語』▽といい、「百物語といふをして妖怪出るや出ざるやためしめん」(元祿年間『怪談老の杖』)そして『諸国新百物語』の「百物語して昔より云伝し怪有りや無しや認めなん」というような百物語で、はじめから百物語に対して懐疑的である。懐疑的であることは百物語によせるかつての真面目な信念は期待出来ず、それは自ずと享樂的な催しに化してしまっていたのである。

世間の現実には敏感であった西鶴がこうした百物語を扱わないはずがない。『諸艶大鑑』(貞享元年四月刊)の巻二「百物語に恨が出る」の百物語には本来の信念など微塵もみられない。

年明前の女郎たちが、いまから寝られもしないので、「百物語初て何が出るぞためしに」と無聊のあまり百物語を始めたが百話になっても何の怪異も現れない。戯れの百物語には怪異の出現もおぼつかなかったであろうが、次第に話が客を騙したことなど身の上の恐ろしさを語って話に真情がこもって来ると「天井のうら板ひびき渡り。屏風ふすまもなりやまず、四方の角より青雲落重りて」くる

と、ついに話の嫖客のあさましい姿があらわれた。そして「日比の偽りかへすぞ」と放った爪や切った黒髪をいらないと投げ返すので、女郎たちはおそれて詫言したがおさまらない。そのうち物がしこき女郎が「各々揚屋の算用残りは」という

と借金ほど好かないものはないのか、化物どもは姿を消してしまった。

百物語では出現を控えた怪異も、ことが己の暴露話に及んでは黙っているわけにはいかず姿をあらわすところに作者一流のパロデーが見られるのであるが、しかもそれが借金の催足されてはたちまち姿を消してしまおうという立派なおちをもった笑話でもあるところを見ると、真面目であるはずの本来の百物語の姿などどこにも窺うことが出来ないのである。西鶴のこの話は百物語に対する当世の認識の一端を形象化したものといえることが出来る。

だが、西村自身には決して巷間のかかる百物語に泥むことはなかったようである。巻四の巻末「不思議は妙、妙は不思議付百物語」を見るならそのことは明らかである。

名跡を息子に譲った某老武士のもとに朋友が集まって、ついで面白きと百物語をはじめたが、百話になっても期待する変事はなかった。「往昔より云ひ伝へたるはさ許もなし」と笑って眠りについたが、翌朝目をさましてみると切り捨てたばかりの生首が五つ、朱の血潮に染って枕元においてあった。一度は百物語をさばかりもなしと懐疑し揶揄した面々も目の前に変事を見せつけられては俗説をそのまま信じざるを得なかったのである。そこで作者は、

されば、此百物語は是魔を修する行にして怪異を祈る法なり。宵より余事をまじへず此事に念をこらしたればかかる不思議はありける。是れを思ふに仏を念ずるの心至って誠あらば何ぞ仏果の妙に叶はざらん。

とつけ加えた。怪事の所以を説いての仏道勸進の臭いの強いところであるが、それよりは一度は百物語を懐疑し揶揄した人々に対する戒めで、一念信心の尊さを説いたものと解するのがよからう。さて、武蔵の某のもとでのこの百物語の話は『宗祇諸国物語』の巻三「話怪異」で宗祇が経験した越後での百物語と全く同巧のものであったが、そこには末尾の件の叙述はなかった。既存の話を用いているその言述は『御伽比丘尼』の作者の意見でなければならぬ。その作者が西村その人であるなら、これこそまぎれもなく市郎右衛門の百物語に対する見解ということになる。百物語が多分に享樂的、遊戯的な催しとして巷に流行しているとき、百物語をかく意義つけたのは極めて保守的な態度であり、その意味で百物語本来の姿を認識した者の言述と考えることが出来るのである。

西村のその認識をもってあの『諸国新百物語』の序文の叙述をみるなら明らかに矛盾がある。その矛盾こそ西村の『諸国新百物語』出版の複雑な事情を物語っているのである。その序文で百物語を「おどろおどろしき話ばかり百に満しめて不思議あるを待つ事とぞ」と本来の姿において認めながら「わが如きは唯何となく見聞したるを打ち交へて語らんこそ此上なり慰めわざ」と意に反して時流に随って享楽化しているのは『御伽比丘尼』の改題故のことであった。当世の百物語に従うなら『御伽比丘尼』の雑多の内容もそのまま「百物語」と名づけることも出来たからである。『狗張子』に對照して急拠出版を企てるためには、その矛盾は承知の上のものであったであろうが、窮地にたった西村の複雑な心境をこそ思ふべきである。

- 注1 拙稿『宗祇諸国物語考』（『近世文学研究』1 昭和四〇年一月）
 2 拙稿『古今百物語』と『太平百物語』（『国語国文研究』52 昭和四九年一月）
 3 堤精二氏『近年諸国咄』の成立過程』（『近世小説 研究と資料』昭和三八年一〇月）
 4 拙稿『貞享三年の西村本』（『長野短大紀要』23 昭和四三年一月）
 5 水谷不倒氏『新撰列伝体小説史』「西村囃松子」（昭和四年七月）
 6 拙稿『林義端の怪異小説』（『長野短大紀要』26 昭和四七年一月）